

土 淨

昭和十一年五月廿三日第三種郵便物認可（每月一回一日發行）
 昭和十一年四月二十八日逕輸省特別後承認可第三五二號
 昭和十一年一月二十五日印刷

第二十二卷

第二號



二月號

言 頭 卷

本年は、四年に一度のうるう月。一日得が出来るわけである。雑誌の編輯などという、時日に始終追われている者にとつて、一日の時日は貴重である。そんなことを云つて、此頃の浄土の發行は成つていないぢやないか、とすぐにしつべ返しを頂きそうであるが、これには深い事情がある。

新春早々、言譯がましいことは止めにして、正常發行を本年の課題としてゐることだけを申し上げておく。

本年のジャーナリズムの話題は「原子力利用實現」というところにあるらしいが、それを更に進めて、「原子力と宗教」といつたところに、宗教ジャーナルの課題がありそうである。宇宙船の構想、地球衛星の建設等々、科學は段々に宗教の世界に伸びて來てゐる。西方十萬億上の極樂世界へも、やがては、毎日地球から定期便が飛び交うといつたことも、もう夢ではなくなつて來た。

こうして、空間的に、科學の領域が廣がることを、宗教への侵害とむきになることは少し早計であらう。科學がどんどん發達し、太陽までも征服し得ても、然し、その科學の首筋を押さまえてゐるものは、ほかならず、ただの人間にしかすぎない。その人間の心の根子を押さえつけるものこそ、宗教だからである。

目 次 (念 佛 號)

山 椿	吉田絃二郎(1)	念佛と生活	佐藤良智(4)
ありがたいお守り	山田巖雄(8)	隠れたる妙好人	須藤隆仙(10)
新興宗教讀本(5)	竹中信常(14)	佛教入門(5)	佐藤密雄(29)
涅槃會に憶う	藤吉慈海(18)	巴御前と覺明(上)	鶴田湛泉(23)
ホノルル通信	松濤弘道(20)	會員だより	(20)
表 紙		結城天童	



山 椿

吉田 絃二郎

櫻も咲き、山椿も咲いた。山椿の花心を覓めて鶉や目白が鳴いている。子供のころ田舎で育つたわたくしは、鶉や目白の聲を聴けばなつかしい田舎の春を思い出す。仙平という男を思い出す。

田舎には椿が多く、冬から春にかけて鶉と目白が家のまわりの椿にあつまつて來た。

目白は鶉に似て、鶉よりもさらに優美な姿を持ち、翼の濃緑色の羽根、眞白に縁取つた可憐な眼は、その澄み切つた聲とともに子供たちの幼い魂を強く惹きつけた。

仙平という男は學校を休んでは目白の鳥籠を風呂敷につつんで山に行き、おとりの籠を木の枝につるして、すこし離れた木蔭に身をかくし、山の目白が、おとりに近づいて來るのを、息をこらして待つていた。

村の學校を卒業してから、仙平は工場につとめていたが、休みの日には二つの鳥籠をかかえて山に入り、目白の訓練に夢中であつた。

仙平は四十そこそこで工場をやめて、先祖傳來の山や畑を賣り、後には家まで人に譲つて、自分分はわづかに残つた地所に小屋を建て、住んでいた。そして毎日二つの鳥籠を抱えて雜木林のな

かにいつて目白を鳴かした。かれは目白の高音を聴く以外には人生に希望はないように想われた。

眼をつぶつて、高鳴く目白に聴き入っているかれの姿は、幼年のころ村の念佛寺で説教がある時、小五條の袈裟を懸けて説教を聴き、お念佛を唱えていたかれを想い出させた。

仙平の家は代々念佛寺の檀那で、京の本山から説教僧が見えた時など一家揃つて念佛寺に出かけて説教を聴き、仙平は説教の間には長柄の干杓をかゝえて御賽錢を集めていた。かれは美聲であつた。ほのぼのとゆらぐ蠟燭の火影にお念佛を申すかれの聲は大人たちの聲から、はつきり區別されて聞えていた。

かれがいつごろから念佛寺に行かなくなつたか知らないが、目白に夢中になり、後には遠い旅をつゞけて目白を探して歩いたりした。

或る時わたくしは博多の驛で布呂敷に包んだ鳥籠を抱えているかれと邂逅つた。何處へ行くのかと問うたら、「對馬に行くのだ。あの島の目白は玄海の荒波の音にきたえられてるので聲がよい。」と話していた。かれは人ごみの中を海岸の方へ急いで行つた。

晩年にはかれはまつたく見る影もなく落魄してしまつた。そして村の人たちは時々かれが念佛寺の鐘樓の板壁などによりかゝつてゐるのを見かけた。後には人目にかゝるのを恐れるようにして、夜の説教を聴くために本堂の廊下の小暗い隅に坐つて念佛を申していた。かれが説教壇の直ぐ前に坐つて念佛申した幼年時代は蠟燭の火か、ランプの火であつたが、かれが何十年ぶりかで廊下の隅で念佛を唱えに立ちもどつたところは幾つかの電燈があかあかとかがやいていた。それは見すばらしいうらぶれのかれの姿を、一層はつきり村の人たちに見せるためのようにさえ思はれた。

仙平が故郷にかえつて来て、本堂にも入らず、ふたゝび念佛寺の小暗い廊下で念佛申すようになつてから、二三年も経つたであらう。かれは誰れにも知られず、小屋のなかで靜かに死んでい

た。二羽の目白は籠から放たれていた。

東海道藤枝の宿に泊つた熊谷蓮生坊は、いざ宿を立とうとして、囊中無一物なことに氣付いた。はたと困つたかれは宿の主あるじに事情を打ちあけて「この次ぎ京に上る折はかならず宿錢を拂うから貸してもらいたい。その代りに大切な抵當をあづけて行く。」と、いつて、おどろいている宿の主の口を大きく開かせ、南無阿彌陀佛と高聲に唱えて主の腹中に吹き込んで、東の方へ急いで行つた。念佛……たゞ一度の念佛にも、命を賭けて唱えていたことが察せられる。かれに取つては念佛は命より大切なものであつた。

阿波ノ介の話はすでに書いたが、かれは放埒無殘の徒であつた。美女をはだかにし、打ち叩いて號泣する聲を聴きながら酒を飲んだ。しかもかれが法然上人を頼つて來た時、上人は宿業に泣くかれをあわれみ、かれのために泣かれた。或る人が上人に「上人の仰せらるゝ念佛と他の人々の申す念佛とは、その功德にちがいがござりましょう。」と、たづねたら、上人は「阿波ノ介が申す念佛と法然が申す念佛といささかのかわりもなし。」と、答えられた。何という偉大な念佛の力であらう。

わたしは武藏野を歩いていた。

屠所に曳かれてゆく家畜の悲しい聲を聴き、悲しい眼を見た。わたしはさびしかつた。

わたしは家畜のために念佛を申した。ただ何となしに。

わたしは小徑の傍に折り棄てられた美しい花を見た。わたしの心は暗くされた。

わたしは花のために念佛を申した。ただ何となしに。

わたしは老木がめりめりと音を立て、伐り倒さるゝを見た。

わたしは老木のために念佛を申した。ただ何となしに。

念佛と生活



人間は忙がしくいろいろの仕事をしている月日が日々夜々と去つてゆくのをしらない。あだかも燈が風の中にゆらめき、いつきえるかわからないようなものだ。

これは中國の、ぜんどう大師の「日ぐれのうた」の初めの文である。私たちの日々の暮しの實體を、言はば端的にあらわしていることばだ。朝起きてから寝につく迄あつといふ間に過ぎてしまふ。各人の宿命づけられた仕事に従い、俗にいふ仕事に追はれて、その日その月がすごされる。日がすぎ、月がすぎ、そして除夜の鐘をきくこ

佐藤良智

とになる。少年がすぎ、青年を送り、そして、桐一葉の秋の聲をきくことになる。暮しが流れ、仕事がながれる。そのなかに、さまざまの人のこゝろが、渦をまき複雑になり、單純になり、瀧となり、瀬となり流れにながれる。人類の歴史が作られる。ひとびとの歴史は、表に流れ、かぎりなく歴史の裏を流れる。こゝに中國の善導大師の詩がきかれるのだ。このように、流れに流れる實現の暮しを、しかしながら、外にしては人生はない。ひとりの人間の生涯は、短くして長い。また、長くして短い。短く思ふのも、長く思ふのも、人びとのこゝろの持

ち方によるそうです。こゝろの持ち方。人生に對する態度これがまた、まちまちであるのだ。まともに人生にたちむかうもの、欲望のまゝに、あれよ、あれよと人生を送りすごしてしまふもの、やぶれ、悲しみのみの人生を送るもの。そして、どのような態度をもつことが正しいのか、正しくないのかは、なかなかきめがたいのではない。しかし、どのようなこゝろのもちかた、人生に對する態度を、とつたらよいかといふ反省は尊いにちがいない。そしてまた、そこから本當の人生が生れでてくるではあろう。しかし、そうは言つてはいられない。うちからせまられるものをもつ時、それをどうすることもできない。すぐれたる宗教詩人、善導大師は、前の句につけて誦して居られる。

人の世は苦しい海だ。この苦しみの海からぬけだせないのだ。こゝに、人生の内からせまられる驚きがあるのだ。安んじて居られない驚きおそれの前の人生。

聞いてほしい。この苦しみの聲を。内に。この苦しみの海から平安な人生の道に出るためには、そうだあなたはいま力がある。體力は健やかすぎる位だ。この時なのだ。自らはげみにはげみ、永遠の道を得たまへ。

大師は、流れる生活の現實のなかに、内から湧き出る驚

きのこゝろを、そして、苦しみの聲をきかれた。これはすでに、いと遠く、大聖釋尊も、「人世は苦だ」と仰せられている。まことの宗教人は、いつも、内からせまられた、眞實の聲をきかれるのだ。

「人生は苦しい海だ」とうたわれたが、いつたい、なぜ、苦しい海なのか。淨土の祖師、法然上人は仰せられている。「われわれは罪惡生死の凡夫なのだ」と。生れ、そして死ぬこの流れては流れ轉する現實。いつたいこれは、何なのか。法然上人が身をもつて求め得られたものは、この現實の理論的解明ではなかつた。觀念といふものによるもつともらしい理くつではなかつた。もつとせまつたものであつた。「罪惡生死の凡夫」。切實なせまられたこゝろ。この自覺は大潮のように法然上人のこゝろをおそつた。深いものに、眞實なものにつながる自覺なのだ。どうにもぬきさしできない自覺なのだ。弱きいたらぬ無力な者ゆえに、いわゆる、凡夫のゆえに、この苦の海から離れ抜けられないのだ。現實の生活の苦の海は、或はあれ狂い、嵐ふきすさぶのだ。凡夫の生きる現實は永遠にこうなのか。この苦の海の流れに永遠にながされ、或はさからい、生き抜いて行く生活しかないのか。しかも、この現實を外にして生活はないのだ。このいたばさみに、人はないのである。苦しむのである。現實の組織をどのように變革しようと、科學化、合理化し

ようと、人間の本質にかゝわるこの現實は、次元が異なるのだ。その故に苦しいのだ。この現實を逃避せずに、しかも苦の海に抗して生きてゆくみちはないのか。眞實をみつめることによつて、さらに道はないのか。

わたくしは、苦しい海の窓―海に窓があるかどうか知らないが―を開けて、すこしばかり、人間の構成についてながめてみたい。しかし、これは、けつして、觀念でつこではないことをおことわりしておきたい。いつたい人間は自分で生きているのか。他と一切かゝわりなく自分だけで生きているのかといふに、なにひとつ、他とかゝわりなく生きてゆくことはできないのが事實だ。そしてみると、人間は生かされて生きているのではないか。自分が自分の力で生きていると思ふのが一般の考へと言へよう。その考へほかに、もう一つ、自分は生かされて生きているのだと思ふ考へ方がある。これがきわめて大切な人間構成について考えられる點であると思ふ。自然環境において、また、社會環境において、または、歴史的現實において、もろもろのかゝわりに於いて生かされて生きているのが人間の現實である。これをもうひとつほりさげてみると、わたくし共のいのちもまた、生かされて生きているいのちではないでしょうか。もちろんいのちといふ抽象的なものだけをいふのではなく、生きている現實をすべて包んだ全體的ないのちを言ふものと思つていたゞきたいが。このような全體的いのちも亦、生かされて生きているのである。いかされて生きている

生活を原始の佛法では、「無我の生活」となづけ尊び、それが理想であつたのです。

さて、かりに、海の窓を一寸閉ぢよう。そして、苦の海にふたたび歸つてみよう。なにかすこしばかり、ほつとするものをかんずる。苦の海の現實を離れ、脱することのできないこの弱い無力なわれわれ、これに抗して、がむしやらに生きようとするわれわれ、このわれわれも本質を洗つてみれば、生かされて生きているのだ。では一體、その生かすものはなにであるか。大聖釋尊の仰せによれば、緣起の諸法であらう。法然上人は、淨土の聖典の御指南によられて、きわめて宗教的な名、あみだぶつと呼びまつられた。あみだとは、申すまでもなく、永遠のみのちといふことである。この永遠のみのちに生かされて、いきることが、また、とりもなほさず、あみだぶつの、いまひとつのおん徳、永遠のみひかりにいだかれて生きることである。この永遠のかぎりのないみのちは、言ふ迄もなく、自然環境も、社會環境も、歴史的現實を通じて全體的に生かし給ふおんいのちであることをよもや誤りうけてはならない。わたくしが、前に、人生のうけとり方、人間への態度を申したのはこゝにつながる。

わたくしどもが、自分で生きると思い誤り、現實に抗するとき、この流れに流れる現實は苦の海であるのだ。流れに流れる現實の日々は、これまた、永遠のかぎりなきみのちの流れでもあるのだ。この現實の流れと、か

ぎりなきみいのちの流れが、一枚になるところに眞實の生活と名づけられるものがある筈である。一枚の生活、一枚になろうといふ生活、それを、しいて言へば、宗教生活と名づけられよう。それでは、いつたい、具體的に一枚の日々の生活とはどのようなものなのか。それが、實は、「念佛と生活」といふ題目になるのである。

なむあみだぶつと口に稱えること（——永遠のかぎりなきみいのちとみひかりに歸一したてまつる時には低聲にこう稱えることも勿論口稱である）——は一枚の生活の根幹である。たゞこゝろに思ふだけでは、觀念になつてしまふ。現實は、申すまでもなく、現實であります。念佛も現實、具體でなければなりません。口稱がこよなく尊ばれる故です。口稱は、現實具體化と、相續との二つの徳をもつている。それがなにより尊い。事相を尊ぶ眞言が、眞言だらにを尊ぶ故がうなづける。

かの有名な法然上人のみことばに、

現實に生活をしてゆくのに、念佛ができるようにするがよい。念佛ができないような生活ではこまる。一家をかまへてはできないなら、所々方々へ修行にでて申すがよい。それでは申せないのなら一所に住して申すがよい。

出家をしては申されないといふなら、在家生活をして申すがよい。在家生活では申されないといふなら山へでも入つて申すがよい。一人ではだめだと言ふなら、みんなと一緒に申すがよい。一緒にだめなら一人で申すがよい。妻子をもつのも念佛が申せなく

なるなら持たないがいゝ。

といふ意味のみ教えがある。この深い、徹した御精神を現代にあてはめれば、どのような言ひあらわしかたもできよう。また、どのような生活様式も出よう。近代感覺の香りさえするではないか。

罪惡生死のかよわきわれわれが、口稱念佛によつて、すなわち永遠にかぎりなきみいのちとみひかりに歸一することによつて、一枚の生活に救われるのである。生かされていきっている、法爾自然の生活にかえつてゆくことができるのである。ありがたい。この一枚の生活も、大ざっぱなものであつてはならないので、念々、すなわち、一刻一刻がみいのちなのである。行、住、座、臥どれひとつ捨てゝはならない。おろそかにしてはならない。上人のおことばに、「食事をするときも、なむあみだぶつとかんでなむあみだぶつとのみこむがよい」と仰せられている。萬事がこのように、まめやかに、日々の一つ一つの小さな事にもこゝろをいたして、暮させて、生きさせて頂くことが一枚の生活の極意なのである。

念佛の門にあつては一應、「生けらば」「死なば」すなわち、生と、死を、分ちするが、「死生共にわづらいなし」と上人も仰せられるように、一枚のくらしの外に、實は生も死もないのである。ともになむあみだぶつ一本なのである。生かし給ふみいのちにおまかせ申して、まめやかに、精進の人生の旅路をゆく。それが救いのある人世なのである。外は冷い木枯がふいている。が、わたしのこゝろは、念佛に、あたゝかい。（大正大學教授）

童話

ありがたのお守

山田 巖雄

ある山寺に年寄つた坊さんが一人の小僧さんを相手に静かに暮していました。

この坊さんはなかなか徳の高い、學問のすぐれた人だという噂でしたが、ふだんは餘計なことは何もいわず、知つたかぶりもせず、朝から晩までお念佛ばかり申していました。

ある日、一人の村の男が訪ねてきました。

「和尚さま、私はこれから急な商用で旅に出なければならぬのですが家の者が方角が悪いから旅行はやめろと申します。といつて行かなければ商賣ができません。何とか道中無事のお守りはないものでございませうか。」

「よしよし、よいお守をあげよう。それさえ持つて行きなされば大丈夫だ。心配はいらぬよ。」

老僧は一度居間に入ると、間もなく出てきて紙に包ん

だお守りをその男にさづけてやりました。

二ヶ月ほどすると、その男は元氣で歸つてきました。

「おかげさまで、何事もなく、無事に行つてまいりました。商賣の方もうまくまいりました。ありがとうございました。」

そういつておみやげの品を置いて行きました。

このことがあつてから、お寺へお守りを受けにくる人がふえました。

「家を建てたいのですが、年回りが悪いので星よけのお守りはありませんか。」

「お葬式を出すのですが、友引きとうい、とらが續くので困まっています。友引きよけのお守りを下さい。」

「安産のお守りはありませんか。」

和尚さんはそのたびに、お札やお守りを作つて渡してやりました。

「年よりが病氣で苦しんでいます。樂になるお守りはありませんか。」

「それはむづかしいな。病氣には何といつても藥と看病が第一ぢや。だが、よいわ。お守りを作つてあげよう。これを痛むところへ貼つて、お前たちが心の中でお念佛をととなえながら、靜かに、よくさすつてあげなされ。」

二三回すると、「病人が、大へん樂になつたと申します。」とお禮にきました。

ある日、小僧さんが聞きました。

「お師匠さま、いろんなお札やお守りがありますが、私にその作り方を教えていただけませんか。」

和尚さんはただニコニコ笑っているばかりで、何ともいいませんでした。

小僧さんは、

「よほど秘密なお守りなのだろう。だからまだ私には教えて下らないのだ。」

と思いましたので、そのまま黙つてしまいました。

何年かたちました。

和尚さんは病気で寝こんでしまいました。

枕もとへ小僧さんと呼んで、

「わしもこの年では、もう長いことはあるまいと思う。

ついては、この寺はそなたにゆづる。佛さまを大切にお守りするようにな。それから、朝夕のおつとめと、日課

のお念佛は怠るでないぞよ。」

小僧さんは驚いていいました。

「お師匠さま、も一度元氣になつて下さい。」

「いや、何事も佛さままかせの身ぢや。お迎えの間近なことはわしにはようわかつていますぢや。お前に教えることはもうないと思うが、何かたづねたいことがあつたら、聞くがよい。」

「お師匠さま、あのお守りとお札の作り方をお教え下さいませ。」

「うん、あれか。幸いそこにお守りがある。それを開けて、中を見なされ。どれも中味はみな同じぢや。」

小僧さんがお守りを開けました。

中に小さくたたんだ紙がありました。何か書いてありました。ひろげてみると、

南無阿彌陀佛

と書いてあるだけでした。

「お師匠さま、方角よけも、災難よけも、南無阿彌陀佛でよいのですか。」

「お念佛だけでよいのぢや。ほかになにが要ろうぞ。我々がお念佛をとなえれば、佛さまも我々を念じていて下さるのぢや。私共がお念佛をとなえて、私共と佛さまが一つになつている時に、何の心配があらうぞ。災が起きようぞ。」

老僧はそういつて、靜かに目をつむつて、かすかな聲でお念佛を申しました。

小僧さんも手を合せました。

小僧さんはそのお寺で一生お念佛を申しつづけて、老僧と同じように人々に尊まれました。

隠れたる妙好人



須藤隆仙

見つけ出したのである。

この木下家は函館の舊家で呉服屋だったとも聞くが、昔は松前藩などにも仕えて仲々立派な家柄であつた様である。

この木下家から稱名寺に寄贈された古文書類は約五百五十點程もあり、後私はこれを整理して、寺に残す可きは残して、他は皆函館圖書館に寄附したのである。以來今日迄數えるのも煩しい程、地方新聞等に名を出され、その度に「郷土史家」という肩書をつけられたのも、實にこの木下家の古書によるものである。

ところが、今、寺に残っている木下家の古書を重ねて整理している中に、私は意外な事を發見したのである。

それはこの木下家に昔「觀性」という出家がいて、この觀性師は非常なる念佛行人、稀に見る妙好人であるという事がわかつたからである。

木下家の「由緒書」が二通あるのであるがそれを調べると次の様になつてゐる。

○中興元祖 木下忠右衛門同徳

○二代 木下忠右衛門同久

昭和廿八年の十月、私は當時問題となつてゐた李ラインの竹島領土問題に關して、これが、日本領土であるという證明の古地圖を發見して、その事が毎日新聞のトップ記事となり、果ては海外の新聞に迄報じられるなど華々しくジャーナリズムをにぎわしたものである。尤も竹島問題は今でも盛に騒がれている

が、當時は我國巡視船に發砲騒ぎ迄起きてそれが發端的な事柄であつた爲に一層注目されたものである。

この古地圖というのは約三百年前オランダ人によつて齎されたものらしく、私はこの古地圖を檀家の木下という家から澤山の古文書と共に函館稱名寺に寄贈された、その中から

〇三 代 木下忠右衛門同隆

この後、まだ四代、五代と続くが、問題の出家は第三代目木下忠右衛門同隆である。この由緒書によると、同隆は越前國新保の人に於て、久末長兵衛同隆といつたらしい。木下家は新保にあつたわけであるが、何かの關係で久末長兵衛同隆が木下家三代目の家督となり木下忠右衛門同隆となつたらしい。

由緒書の原文を載せておく(原漢文)

一 三代家督

久末長兵衛同隆

久末氏元來家業諸山請負人なり、同隆壯年の頃より實家商賣の業を志し、元祿年中、奥州南部御領へ下り檜山數ヶ所を請負い、身帶拾千兩に及び、此地田名部通大畑町へ家屋敷を所持し木下忠右衛門同隆と改む」さてこの次が問題である。この同隆が誠に殊勝なる淨土念佛行人となつてゐるのである。同書に續いて次の如くある。

「忠右衛門代近山諸々に神佛再建あり、此人若年の頃より學文に志深く、儒道神道をも學び、佛書をも委く讀誦し、因縁熟せし時至れるや東都へ登り、淨土宗三緣山増上

寺三十五世學譽上人に拜謁(中略)淨土宗

安心起行を初め、善導空師釋文、選擇集の極意を悟り、始め鎌倉へ趣き東本山五十五世金戒光明寺通譽彼岸和尚へ拜謁、師資相承契て結び、老年に及び出家得度、兩脈相傳の上先祖父母の戒名を改め下さる事左の如し、金戒光明寺彌陀建立云云六字御名號を得譽念到觀性に授け、今に同家に傳來す」以上である。

素人書きで一寸文章も變であるが、もうこれで説明の要はないと思う。簡単に解る文章である。即ち同隆は、増上寺卅五世學譽上人の教化を蒙り、光明寺通譽上人より血脈を得、老後は本式に出家して觀性比丘となつてゐるのである。法名は左の通りである。

想蓮社得譽念到觀性比丘

尙老後出家してから先祖父母の戒名を改めたところがあるが、淨土宗となつたのは同隆、即ちこの觀性からであつて、それ以前木下家は一向宗であつたらしい。由緒書に觀性の祖父母、及び父母の淨土宗の法名あり、

「右越前新保經蓮寺一向宗、法名改通譽上人

ヨリ被下」

と但書がある。

又、觀性の法名の脇に「此人改宗シテ淨土宗トナル」とある。

即ち先祖は一向宗だつたものを、觀性は淨土宗に歸信し、淨土僧侶となつた爲、光明寺通譽上人より淨土宗の法名を授けて頂き全部淨土宗に改めたのであらう。

尙増上寺卅五世學譽上人とあるが、これは何かの間違ひであらうか。學譽問鑑上人は卅九世であり、卅五世は湛譽門周上人である。

鎌倉金戒光明寺というのもおかしい。勿論間違ひであらう。後人のしかも在家の方が聞覚えか何かで書いた由緒書であるから無理もない。五十五世通譽彼岸和尚とあるが、鎌倉光明寺五十五世は通譽岸了上人である。

但し同書中に

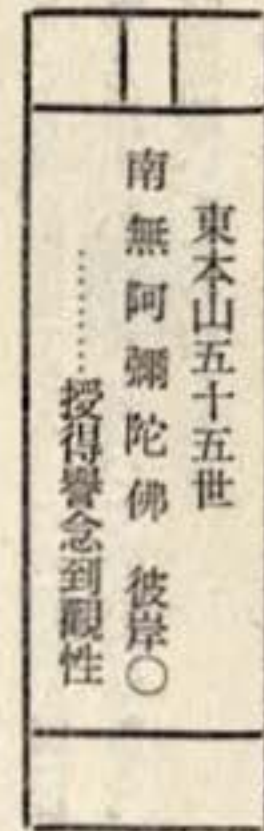
「入蓮社通譽上人到彼岸了和尚、享保元年七月十七日御忌日、後東總本山花頂山住職、本山知恩院ニテ往生」

とあるからこの分は立派に訂正されているわけである。通譽上人は知恩院四十四世となつてゐる。

とにかく増上寺や光明寺の高徳の化導を受け

た事は事實らしい。

又、この由緒書には通譽上人から頂いたといふ御名號の畫が書いてある。



といった具合である。

さてこの外、觀性は祐天上人から御念誦を授けられている。

次の如く記されている。

「享保三戊戌年七月十五日御忌日

明蓮社顯譽上人愚心祐天大和尚

増上寺三十六世

祐天上人自往生五御念誦

授得譽念到觀性」

あゝさりとは、かくのごときあさましきわれ、佛の本願によらずんば、いかでか往生極樂の大事をとげたてまつるべきやとにもかくにもこのつみふかき身をうちまかせたてまつる南無阿彌陀佛、あゝかへすくも御本願あやまちたまわず、必ずりんじゆうのゆふべには、やすくとむかひと

りたまへ、南無阿彌陀佛、あゝおんやくそくにたがわず引させたまへ

南無阿彌陀佛

あゝ南無阿彌陀佛く

あゝたすけたまへや

あみだ佛く

ひふつこんげんざいせじゆう

ぶつたうちふんせいぢうくわん

ふこしゆじゆうせふねん

ひつとく往生

決定往生

南無阿彌陀佛」

そして更に

「祐天上人御念誦五奇持に依り、不思議に命

終の日時を諭し、前日怠なく佛名を唱え、

眠が如く往生の素懷を遂ぐ、

當家・大切五比丘也、中興元祖と定む、

大畑寶國寺境内葬」

とある。

何という殊勝な事であらうか。

私はもうこゝ迄書くとい何の私見も述べられなくなる。

下手くそな文字と文章とで綴られた片々たる

由緒書ではあるが、この由緒書は見てみると涙が出てくる。

觀性という名もない一人の出家が、南無阿彌

陀佛、南無阿彌陀佛、と唯、只管彌陀の本願

を頼りに生き抜いたその姿が尊くて、私は唯

もう泣けてくる。

觀性は多く佛像等も建立したらしい。

次の如くもある。

「同隆代諸々深山の神佛建立有と雖も、今是に現在知る所を書記す、

南部御領大畑在小目名村絶頂山に觀世音菩

薩建立云云

右 乗佛願力入大會

法界衆生同引攝

表佛

左 神力演大光普照無際土

消除三垢冥廣衆濟厄難

裏 妙香山 願主觀性建立

寛保三癸亥年四月十七日

山ノ王 大寶院代」

南部大畑とは現在の青森縣下北郡大畑町であ

る。

この大畑の淨土宗寶國寺の住職菊地さんは大

畑の町長さんである。私は菊地さんに「觀性建立の觀音像は現存しますか」と尋ねてみた。「現在も安置あり、小目名の人達の信を集めております」と菊地さんは知らせて下された。二百十數年前、隠れたる念佛行人觀性比丘の建立したこの觀音像を、私は是非一度拜まして頂きたいと思つてゐる。

觀性は延享四年四月四日、往生している。先にあつた様に稱名念佛の中に眠るが如く彌陀の淨土に迎えられたのだ。

更にこの木下家の由緒書をめくると、天保十一年八月十日に木下勇次郎という十七才の少年が死んでいる。觀譽喜誦居士と法名ありその脇に次の如く但書してある(□は不明)

「此人幼少より箱館大町江州十一屋□□店へ見習奉行致し勤め申病死す。此時主人上方へ登り留守支配人太右衛門と申す。

勇次郎主人より名を改められ熊吉と改む。

命終の夕、念佛數邊中より右、太右衛門様〳〵と呼ぶ事數度に付き、使を□□早速参り□□同人を見るより、手を互に合せ兩人にて高らかに南無阿彌陀佛と佛名を唱へ、やゝ暫くして眠るが如く往生の素懷を遂

ぐ。

此人觀性の再來と思ふ。運なくして早世せり、誠に主人も下り大いに力を落し、存命なれば、當年は上方へ初登り致さず由、殘念此事に申し居候、

(……不明)臨終の時念佛申す、兩親並びに家内一統安心いたし極樂参り決定」

急いでこの一文を書いているのでまだすつかり讀みとれぬ所もあるが、とにかく右の一文の意味は充分解ると思う。

勇次郎という十七才の少年が南無阿彌陀佛と稱名念佛の中に往生したというのである。

あゝ、何という事であろうか。

私はもう涙が出て来て、原稿用紙の上を走るペンの跡も見えない。

觀性比丘といふ、勇次郎少年といふ、何と立派なる念佛行人ではないか。

尊い妙好人ではないか。

とかく妙好人といへば、宣傳的に作りあげられたかの感あるものもあるが、私は實際に今此處に史實の上に、この二人の尊い妙好人の事蹟を徴するに及び、唯もう感無量である。觀性比丘以來木下家は立派な信仰の家だつた

のであろう。だから勇次郎少年の様な方も出たのであろう。

因みにこの木下家は後に松前に渡り、松前から函館(當時箱館)に來たのであつて、勇次郎少年は箱館で亡くなつてゐるわけである。

書きたい事は澤山あるが、私はもうこれ以上書けません。どうか讀者の皆様は、こゝに轉記した由緒書から、簡単な由緒書ではあるがこの中から、觀性比丘と勇次郎少年の尊い信仰の姿を拜して下さい。

合掌

(付言、私はこれ迄随分地方史的に貴重な古文書を發見し、北海道新聞や函館新聞等に盛んに書立てられ、ラジオで放送したり、地元の大學の教授方から來訪を受けたり、果は學校教員や、中學、高校大學の各生徒が郷土史研究の指導をしてくれといつて來るなど、全くその方面としては自分でも自惚れる程多彩な事をやつておりますが、しかし、どれもこれも、この木下家の由緒書の中に妙好人を發見した事實から見れば足許にも及ばぬ事からで、私の喜びとしても前者と後者とでは乾坤の感があります。この様な尊い妙好人の史實を前にして、こうして調べられる自分を幸福だと思ひ、偏に大慈大悲の御恵みと感謝合掌致します。(一九五六、一、一〇)



念佛と題目

——新興宗教讀本 その五——

竹 中 信 常

おことわり

前回の豫告が、本月は「因縁とたたり」についてお話しする様に申しておきました。が、本月の本誌が、「念佛讀本」の特集ということなので、豫定を変えまして、「念佛と題目」とについて、宗義とか、教學とはちがつた、生活に即した面から、考えてみることに致しましたから、御了承下さい。

一

講習會などで、よく質問されたりするのですが、佛教系の新興宗教には、何故「日蓮宗」が多いのでしょうか。一寸數えてみても、「お題目」を唱える新興宗教は非常に多い。靈友會、交成會、佛所護念會、妙智會、創價學會など今日、一應盛んだといわれる新興教團の大部分は、みな法蓮經を中心とする「題目」系統のものです。

靈友會は、創立以來何回も分裂しました。靈友會から分

れて、今日或程度の勢いを持つてゐるものは十數派あります。立正交成會などは、靈友會から分れて、逆に、靈友會を壓倒してしまひそうに盛んになつております。ですから題目系の教團が多いというのも、考えようによれば、次々に新しいものが生れるというのではなく、古いものがどんどん分れたということになる。してみると、題目系の教團には、何か、分れやすい要素があるのではないかと考えられます。

いづれにしましても、佛教系の新興教團に題目系のもので多いということは事實ですし、それは、全然、無から有を生ずるように出たものではなく、古いものから分れて出て來たものであることも事實です。

それなら、何故、こんなにどんどん分れるのでしょうか。これには、いろいろの原因があるでしょうが、私には今のところはつきりした原因が分らないので、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

同じくお唱えをするのでも「念佛」の方は、余り分派が

出ないということです。これにもまた、深いわけがあることと思われまゝ。それですから、題目には分派が澤山出るとし、念佛には余り出ない。こういった點を比較してみるものがまづ第一でしょう。

二

題目というのは、「南無妙法蓮華經」という言葉を唱えることで、いうならば、お經の表題を何回かくりかえしていることです。これは日蓮上人が始められたことです。ところが念佛の方は、一般には「南無阿彌陀佛」を何回となく唱える「稱名念佛」とされており、これは、淨土宗の開祖法然上人が、長い間の佛道修業の結果、やつと得られた尊い體驗だつたのであります。然し、念佛——佛を念ずるということは、ずつと昔の、インドの佛教の時代から行われていたのですが、それを、佛の御名を稱えるというふうに変更されたのは法然上人なのです。何故、念ずることから唱えることに變えたのでしょうか。これには、色々とむづかしい、教義學上の理由もあることですが、極く簡単に、そして、現實の宗教生活に即して考えてみますと、それは「誰でもが、いつ、どこでも出来る」からであります。それまでの佛教が、天台・眞言・禪などの、非常にむづかしいものであつたために、學問のない一般庶民にはわけのわからぬものであつたのを、法然上人は、何とかして、どんなに愚かなものでも、どんなに貧しいものでも、みんなが同じように、そして働きながらも出来る信心はないも

のかと、大變な苦心の末に、生み出されたのがこの稱名念佛だつたのです。ですから、法然上人のもとへは身分・階級の別なく凡ゆる人々が、その教えをききに集つたということです。

このように、誰でもが、いつ、どこでも出来る佛道修業のために、稱名念佛——南無阿彌陀佛が唱えられるようになったのです。いわば、佛教を大衆のものにしたわけです。或はまた、信仰と生活とを合致したともいえます。

題目もまたこれと同じです。妙法蓮華經(略して法華經)というお經は、大變むづかしいお經です。一般の大衆には仲々わかりにくいお經です。だから、その内容を一々理解するのは大變ですから、その題目だけを唱え、それで法華經に書かれてある功德を受けようというのです。題目だけ唱えるのでしたら、どんな無學な人も、どんな老人・子供にでも出来るわけです。日蓮上人は、矢張り色々のお經を研究した結果、法華經が一番よいと考え、而も、その法華經を誰にでも出来るように表題だけを唱えればよいとしたのであります。唱えるということ、それによつて佛教を大衆のものにしたこと、ここまでは法然上人と日蓮上人とは同じ道を歩いたのです。いやむしろ、時間の上から云つても、法然上人の亡つたのが西歷一二二二年、日蓮上人が日蓮宗を始めたのが一二五三年で、約四十年の前後がありますから、或いは、法然上人の歩んだ道を、日蓮上人が——考え方はちがうけれども——同じ思いで追つて行つたともいえましよう。

ところが、御承知のように、日蓮上人は有名な四箇格言——念佛無限・禪天魔・眞言亡國・律國賊——といつて、在來の宗派を全部邪法だといつてゐるのです。こうなると法然上人の歩いた道を歩くわけには行きません。こちら邊りに、念佛と題目とが全くその方向を逆にした分れ道があったようです。

然し、念佛も題目も、誰でもが唱えられるという點で、當時の大衆には非常に喜ばれ、それだけに、充分流行もしたものでした。ところが、現在では、題目はやるが、念佛は餘りはやらない。はやるはやらぬというのと、何だか下品に聞えますが、それは大衆に受け入れられるからられないかの、パロメーターの意味です。落語などによくいわれることですが、自殺や心中する時に、南無阿彌陀佛とはいふが、南無妙法蓮華經とは餘りいわないようです。どうも、念佛の方が陰氣です。題目は、特にお會式の團扇太鼓などでは、非常に陽氣で、浮かれ出しそうです。また、念佛は一人靜かに、ひそやかに唱えられるにふさわしいものです。が、題目は、大勢が聲を揃えて、鳴り物入りでやるのに適しています。こういつた、表面的な相違も、現在のようにマス・コミュニケーションの盛んな社會に於いては、念佛と題目との流行の差が出て來る一因ではないでしょうか。

三

念佛は、阿彌陀佛に歸依し、おすがりしてその願力によつて極樂淨土に救いといつて頂くのが目的です。それですか

ら、念ずる念じ方には、觀念とか稱名とか、いろいろちがひがありますが、念ずる對象は「阿彌陀佛」という、確固とした人格であります。念ずる相手がきちんと言まつてゐるのですから、そこには餘り異見も分派も出ないのが當り前です。

それに對して、題目の方は、「法華經」という大變長いお經の題を唱えるのですが、この法華經というものが、長い上にまた内容的にも複雑で、色々に解釋出來るのです。相手が長いお經ですから、自分の讀み方一つで、またどうにでも變つて參ります。近來やかましくいわれてゐる創價學會では、「世人がよく法華經」というと釋迦の廿八品の法華經だけだと思ひこんで居るが、釋迦の廿八品は脱益の正法時の法華經で、熟益の法華經は像法時の天台の摩訶止觀であり末法下種の法華經は日蓮大聖人の南無妙法蓮華經の七文字の法華經である」(折伏經典一二三頁)といつて、法華經とは「南無妙法蓮華經」の七字の題目以外の何ものでもないとするしています。法華經の廿八品(章)を二つに分けて本門と迹門とにすることは、從來日蓮宗ではよく行われて來たのですが、靈友會や交成會ではその中の「壽量品」だけを珍重している。こうして、法華經もその立場によつて色々に、ちがつた意にとられるのですから、同じ題目を唱えても、そこには様々の異見が出るわけです。ここに、題目系の教團に、分派が多く出て來る大きな原因が秘んでゐるようです。

先にも挙げたように、日蓮系の教團は、宗祖日蓮上人の

四箇格言を重んずるために、自然、感情的にも排他的となりがちです。これがまた、分派を生ずる一つの素因にもなっています。他を排斥することは、他面では獨善的になり易い。そうすると、自分の宗派乃至派閥丈けがよいと思う結果、同じ題目を唱える同志の間にも、感情的に段々對立が起つて來ます。ことに、念佛のように一人で靜かに唱えるのところがつて、大勢が集團をなしてどんつくどんつくやつてゐるうちには、群集心理の作用によつて、排他的感情があほり立てられて、時には口論・惡口も飛び出すということになるわけです。

もう一つ、これはその道の學者にお訊ねしてみても、一概には言えぬことかも知れませんが、法華經に説かれてゐる色々の「方便」ということが、現世利益と結びつけて考えられがちだということです。そうでなくとも念佛は「來世成佛」ですが、題目は「即身成佛」で、この世に於いてそのまま佛様になるというのですから、極めて現實的です。こうして、現世現實と深いつながりを持つということは、新興教團が現在にアツピールする要因となつてゐます。そして、それだけに、現實の問題の取り上げ方一つで、どのようにでも新しい教えを立てられもするわけです。

四

題目系の教團が分裂し易いという理由を、色々に考えてみました。が、どうも未だはつきり致しません。皆さんと共に

今後大いに研究して行きたいと思つております。

然し、それというのも、題目なり、念佛なりを外側から眺めてゐるからかも知れません。小言幸兵衛の落語ではないますが、小言をいいながら念佛を唱えたり、あらぬことを考えながら題目を唱えたり、いわゆる空念佛・空題目では駄目です。本當に、心の底から、湧き上つて來る念佛、一茶の句に

雪の風呂南無阿彌陀佛と沈みけり

とあるように、寒い日に、溫い湯にどつぷりと體を沈ませる。冷え切つた手足が、ほのぼのとあたためられて來る。「ああいい氣持ちだ」そう思う心が、佛への感謝となつて念佛の事が自然に湧いて來る。こういった境地に入つてこそ、本當の念佛といえるのでしよう。そして、こういった念佛を常住不斷に唱えてこそ、念佛を體得した人といわれるのでしよう。

念佛がどう、題目がどうと論ずることはやさしいことです。けれども、本當にそれを體得することはむづかしいことです。更に、それを他人に傳へることは一層むづかしいものです。裏口から顔を出した隣家のおばさんが、信仰のおすすめに來て、いとも簡單に喋々と題目の功德を喋りまくつてゐるのを見ると、背筋が寒くなるようです。こういった人々の、ほんのささいな體驗が、どうして、重大な信仰の指針となるわけがありましよう。まづ、自分の脚下をみることに。まづ自分の「念佛信仰」をもう一度、眞剣な氣持ちで、ふりかえり、味合いなおしてみることが、何よりも大切なことではないでしょうか。

(大正大學教授)

涅槃會に憶う

藤 吉 慈 海

わたくしがお釋迦さまのおなくなりになつたクシナーラーの聖地をお訪ねしたのは、昭和二十八年一月八日のことである。暑いインドでも一月ともなると夜など寒いので毛布を持って出かけて行つた。ベナレスから夜汽車にゆられて朝早くデオリヤ驛につき、そこからバスに乗つて一時間ばかり行くと、クシナーラーにつく。途中、野猿の群におどろきながら行くと、黄色い菜の花が一ぱい咲いていて、かすかな郷愁を覚える。それでも佛陀入滅の聖地クシナーラーは静かな小さい村里である。

大菩提會の宿舎に行きアチュタナンダ比丘のお世話で、大涅槃塔や佛陀最後の説法地や茶毘塚にお詣りする。大涅槃塔の前にはサー

ラーの樹が數本植えられ、あたりには僧院のあとや冬枯れたシサム樹の林がある。涅槃堂の中には大きな涅槃像がまつられ、黄色い法衣がかけられていた。その枕もとに立つて般若心經と舍利禮文を讀誦しながら思ひは遠い二千五百年の昔にかえるのであつた。

今年八〇才になられたお釋迦さまはさすがに旅をするにもお疲れが目に見えて來た。ながらくおつかえして來たアーナンダには、それが心配の種であつた。お釋迦さまはバザ村で鍛冶屋のチュンダの持つマンゴーの樹の下に休んでいられた。これをみたチュンダは喜んで佛陀を家の中に招じ、御飯と美味しい輩（モノ）の御馳走をしてもてなした。お釋迦さまはその輩をすこしお食べになり、弟子たちには與

えないように申され、チュンダに對し説法をして法悦にみたしめたのち、クシナーラーへ向つて行かれた。その途中、佛陀ははげしい腹痛のため止むなく道端の一本の樹のもとで休まねばならなくなつた。

「アーナンダよ、私は渴いている。水を持ち來れよ」

と申された。アーナンダはお水を世尊に捧げた。それを飲まれた佛陀は元氣をとりもとどされた。そして、アーナンダに向つて、チュンダが悪い食物を供養したことを後悔しないように、彼が佛陀に最後の食事を供養したことは彼の善根に資するであろうと申された。世尊は恐ろしい苦痛と死の寸前にあつても、なおこのように思いやり深くあらわされた。

そして佛陀は立ち上つて、弟子たちと共にヒラツニャヴティ河畔のクシナーラーのサーラ樹林に行かれた。そしてアーナンダに向つて、「アーナンダよ、サーラー双樹の間の座席に法服を擲けて欲しい。私は疲れて臥したいと思う」と申された。アーナンダは世尊の頭を北にして、サーラー樹の間に床をしつらえた。佛陀はそこに横臥せられた。するとサーラー双樹はまだ花咲く時節ではないにもかかわらず満開となり、花は世尊の上に雨と降

りそそぎ、天上には妙なる樂の音がして、美しい光景を現出した。

そこにスバッタという一人の商人が、世尊の入滅の近いことを聞きつけて、やつて來た。佛陀はスバッタに向つて「八正道を實踐すれば涅槃に至るであらう」と教えられ、彼を最後の弟子として教團に入ることを許された。そして佛陀は弟子達に向つて、「私の歿後、汝等のある者は、われらの師の唇は閉ぢられわれわれにはもはや教導者はないと思うかも知れない。しかし、友よ、汝等はそう思うべきではない。私が汝等に教えた教法、汝等の爲めに定めた清淨な生活の律は、私の歿後、汝等の師となり指導者となるであらう」と教えられた。

そして、また世尊は「私の滅後、もし教團が、そうしようと思うなら、末梢的律を捨てよ」と申された。程なく世尊はもう一度口を開いていい給う。「今、ここに比丘達よ、私は汝等に勧める。破壊は凡ての複雑な物からそのものの内にある。放逸ならざるように努めて、解脱に向つて精進せよ」と。

これが佛陀の最後のお言葉であつた。そして世尊は大般涅槃に入り給うた。クシナーラの東の門の前で、マッラ人のおもだつた人

々がこの「世界の光」ともいうべき世尊の身體を火葬に附した。その場所は大涅槃塔の東にこんもりとした塚として今日ものこつてゐる。

わたくしは、この佛陀の最後のお言葉を味つてみたいと思う。佛陀はわたくしたちに、「末梢的律を捨てよ。破壊は凡ての複雑なものからの内にある」と申していただける。わたくしたちは末梢的な教團の規則や教理解釋にこだわつて、恰もわだちの中に深入りして、動きのとれなくなつた車のようになつてはならぬ。それらを踏みこえて常に教祖の精神に觸れ、宗祖の信仰に直參しなければならぬであらう。

今日の學界も教界も宗教の本質を忘れて、末梢的なことに執われすぎてはいないだらうか。佛教があまりにも過去のことになじみすぎて、それを將來如何に生かして行くべきかの問題を忘れたとき、佛教は過去の佛教ではあつても今日の佛教ではありえない。

一體人間の努力のどれだけが解脱に向つてなされているであらうか。わたくしたちは生活のため、妻子のため、またあるときは國家社會のため、あるいは廣く人類の福祉のために努力することはあつても、自己の解脱のため

に一體どれだけの努力と工夫をなして來たであらうか。他人のためにの美名のもとに自己の解脱への努力が見失われてはならぬ。嚴しい自己の反省なしに他のための奉仕が利他の働きが十分になされ得るであらうか。自己の踪失、主體性の踪失がいわれるが、奴隷根性はこんなところにも潜んでゐる。

われわれは、しつかりした信仰を確立して佛陀の最後のお言葉に答えうるところがなければならぬであらう。末梢的律を捨てよといふことは、現代にふさわしい教團を樹立せよということであらう。從來の因襲を打破し、清新にして潑刺たる教團を樹立すること、これが目下の急務である。皮相安易なる追隨をやめよ。愛宗護法ということすら今日大いに反省を要する、それは決して過去への郷愁に涙することではない。教團のセンチメンタリズムを踏みこえて深い信仰に基くたくましい行動性に生きよ。涅槃とは決して消極的靜寂主義ではなかつた筈である。すくなくとも大乘佛教は涅槃に積極的意味を見出して動いた教團の革新運動ではなかつたか。

われわれは佛陀の最後のお言葉をもう一度反省してみよう。「汝等、放逸ならざるように努めて、解脱に向つて精進せよ」

ホノルル通信

ホノルル浄土宗別館にて

松 濤 弘 道

前略

ホノルル到着以來二週間で當地の佛教事情を概観する事は、一種無暴でもあり冒険でもありましようが、或る一面から考えれば、案外見ぬものを見たフレツシユな印象で眺められる特權もあろうかと思ひ。此處に大ざつぱにハワイの佛教事情について、自分のじかに見、經驗した範圍内につい

て、少々記してみたいと思ひます。

ハワイと云ふ處は、白人をはじめ日系米人、中國系米人、フィリッピン系米人、ハワイ人等の雜居する國際都市で、全然人種の差別が見受けられません。

各國人種の寄合の結果、移住の際、その母國で信仰する宗教が附隨して此地に傳播し、各々獨立したコミュニテイ（地域社會）の中で、獨自の存在をしています。

したがつて、キリスト教に於ても、カソリック、プロテスタント其他の教會が分立し、その中には白人だけのものや、中國フィリッピン、日本人經營のものと、人種別に分れている様です。

佛教では、ハント師の主宰する西歐佛教團の教會や、二、三の中國系の佛教寺院以外は、殆んど日本人の佛教教會で、浄土宗はじめ浄土眞宗、西本願寺派、東本願寺派、曹洞宗、眞言宗、日蓮宗、妙

會員だより

御願の件

○法然上人「一枚起請文」パンフレット十數回反ぶく拜誦いたしましたが、末項に不明の點がありまして何と考へてもわかりません。

何卒御教示下さる様御願致します。

第三章に

す。即ち「十力四無畏三身四智」の九文字の意義を御教示下さらば難有仕合せに存じます。

右は念佛の勵みといたしたい念願でございます。

敬具

會津若松市榮町

穴澤貞藏

お 答 え

念佛稱名をお勵みになり、「一枚起請文」のパンフレットくりかえしお讀み下されました趣拜承、御

精進の御姿を偲び、深く隨喜申上ます。

おたづねの「四智、三身、十力四無畏」はいづれも、佛の御德を種々の方面からたゞえた言葉でありまして、法然上人は『選擇集』

「然れば則ち彌陀一佛のあらゆる四智三身十力四無畏等の一切の内證の功德、相好光明說法利生等の一切の外用の功德、皆悉く阿彌陀佛の名號の中に攝在せり、故に名號の功德勝れたりとなす。」とあります。すなはち、阿彌陀佛は四智乃至四無畏などの尊いはたらきの御德を内にお持ちになり、外には尊いおすがた、智慧の光明說法、人々を教化せられる等のはたらきの御德をお持ちになるので

法寺派の各別院がホノルル市内に散在しております。

一八九八年に、アメリカに合併してから開けた處なので、それ以後の開拓移住者で成立ち、特に日本人の場合廣島、山口、和歌山、熊本縣等からの集團移民の方が多いので、必然的に、その地で信奉されていた宗教が、移住と共に傳えられていると云つても過言ではないかも知れません。

そこは都會地に比較して、信仰の厚い地であつた理由もあるでしょうが、こちらでは日本以上に佛教が盛んです。

その理由は、一つには今申しました様に、開拓移住者の祖先からの宗教であつた事と、もう一つには、日本を離れるとかえつて郷愁の念が強くなり、一人ぼつちで苦難の道を歩んで行くにはどうしても信仰心が必要であつた事です。

大ざつぱに云つて、だいたい此の二つの理由からと、近年になつてからは、日本の同郷人、同國人が少なくなつて行く結果、一つのクラブ（集會所）として、寺院を利用する様になつたのと、アメリカの特にキリスト教の影響で、日曜日にもお寺詣をする習慣が折り重なつて、佛教會は社會になくはならぬ存在として、一大勢力を持つており、一般の人々は、聖職者（僧侶）に對しては絶對的な尊敬の念を持つております。

以上の様に、當地に移住された人々の精神的支柱として、寺院教會がそれらの人々によつて建立されたので、日本の寺院の組織とは少々異なり、信徒の代表者より成る理事會が寺院教會の運営に當つております。

従つて皆、寺院を自分の家同様に考え、月詣り等も缺かさず、家族親戚中そろつて寺詣りをします。

日曜日には、午前六時に晨朝の勤行、八時半に幼少年部の禮拜、九時に青年部禮拜、午後二時には一般禮拜があり、盛況を極めます。

あるが、これらの御徳の悉くは南無阿彌陀佛の名號の中におさまつていのである。それ故に名號の功德は勝れているとお示しなされたのであります。實に念佛は最高完全な佛の御徳が悉く含まれている勝行であります。

選擇集には阿彌陀佛の本質たる念佛がこの最高完全を示す勝行であると共に、誰でも、いつでも、どこでも稱えられる易行であると説かれています。即ち、阿彌陀佛の選擇本願は勝にして易なる行、即ち最高價值であると共に普遍なる所以をお示し下されたのであります。

さて前に記された四智等を、かゝるに説いておきます。

四智——佛のすぐれたる智慧を四方面から見たもの。

1、大圓鏡智、みがゝれた鏡は、何ものでもそのまゝにうつすように、一切のものをありのまゝに完全に知る智慧。

2、平等性智、一切の人々に大慈

悲の心を起し、みな平等の價值をもつていると知る智慧。

3、妙觀察智、天地一切萬物のすがたをよく觀て、人々のために説法し、如何なる疑いをもはらひのけるはたらきの智慧。

4、成所作智、未だ佛法の眞實を知らない人々を教え導いて下さる智慧。

三身、佛の御身を三方面からたゞえる。

1、法身、宇宙の道理、そのまゝ（眞如）を指す身。

2、報身、衆生を導かんとする願を立て修行の結果得られたる身、

一切衆生を常に救い導かれる身

3、應身、釋尊の如く、此世に出現して人々を教え導いて下さる身、

十力——十の正しい智慧の力

1、處非處智力、道理と道理でないことをありのまゝ知る力。

2、業異熟智力、過去、現在、未來の三世にわたり、我々の行爲とその報いをありのまゝに知る

若い人達には、英語字讀佛歌やお説教もします。

養老院や病院慰問も缺かさず行い、寺院が社會のいいこの場所となつていて、一つも暗い處がありません。

何分佛基兩教會共、各々西洋式の建築で、パンヤンや椰子の樹蔭の芝生の奥まつた處に、獨自の建て方でそびえており、皆車で寺詣りをします。

常夏の國ハワイの名にはづかしくない様、實際溫暖の地で、やわらかい日ざしが常にさし、時々思ひ出した様に、軽いシャワーが來て、いつも芝生や樹木がみづみづしています。

ですから、ほこり等は棄にしたくもなく、この美しい環境の中で人々は各々の生活をエンジョイしています。

時間も嚴守し、思つた事はどんどん實行に移します。

そう云ふ點、日本以上に佛教が生活に浸透している様に感じられます。

椎尾先生の常に説かれる「明るく、正しく、仲良く」と云う事が此の地で自然に育てられている様な氣がします。

人々は大らかで明るく、くよくよししません。

氣候も良く、生活がしやすいせいかも知れませんが、當地に來てまづ感じた事は、只「あたゝかい」と云う事でした。

それは氣候があたゝかいばかりでなく、此處に住む人々の氣持のあたゝかい事もふくまれます。

それが混然一體となつて、フワツと體をつゝんでくれます。

これも佛恩のお蔭と感謝しておりますが、これから多分この氣持は持ち續けられると確信しています。

だんだん當地の生活に慣れて來るに従つて、缺點も目について來る事でしようが、今日は思いついたまゝを書き記しました。

日本はまだ嚴寒の眞最中でしようが、どうぞ皆さんお元氣で。

力。

3、靜慮解脫等持等至智力、しづけさ、さとりのおさまさまな姿を悉く知る力。

4、根上下智力、いきとしいけるものゝ、器のすぐれたもの、劣れるものを知る力。

5、種々勝解智力、いきとしいけるものの種々のねがいを、そのまゝに知る力。

6、種々界智力、種々雜多な世界をそのまゝに知る力。

7、遍趣行智力、いかなる世界へでも至る道をそのまゝに知る力

8、宿住隨念智力、過去世にあつた事情、境遇をおもひ知る力。

9、死生智力。未來の生の善惡、不幸を知る力。

10、漏盡智力、煩悩のなくなつた。さとりのお身として得る法を知る力。

四無畏——畏れなき信念の四方面

1、佛は完全最高のさとりを得たと明言し、

2、佛はあらゆるわづらい惱みを盡したと明言し、

3、佛は正しい教の障りと迷いのことを説き、

4、佛は、佛の教により苦を超え惱をのがれる道を説いて、

この四つについてし、佛教以外の宗教を信する者が反對し、或は如何なる邪魔をしようとする者に對しても、少しも畏れぬ信念を四無畏という。

佛の御德はこの外に大慈悲等としてたゞえられています。今申す念佛は阿彌陀佛の選擇本願の念佛であるから、これらの一切の御德は名號の中に攝まつていとお示し下さいました。念佛申す身はその御德御はたらしきによつて只今から限りなく導かれ救われゆくのであります。まことに念佛は現在より未來永遠のお救いでありま。共々に念佛をはげまして頂きまし。よう。

(藤井實應)

巴 御 前
と 覺 明



鶴 田
湛 泉

治承四年二月廿一日、高倉天皇位を譲られ、御齡僅かに三才の安徳天皇が位に即かれた。

こゝに清盛は、外祖父となり一層權威を奮ふことが出来る立場となつて、平家の榮華の花は燦然と咲き開き光輝を放つに至つた。が平家の政落の破綻とは、早くもこの中にはぐまれてゐたのであつた。

安徳天皇が、位に登られてから三ヶ月も経ない頃、紀伊の熊野權現の別當湛増から、急使を福泉に送つて變を報じて來た。それによると、後白河法皇の第二皇子、高念宮以仁王が、東國の源氏を促がして平家を滅ぼさんと令旨を賜はり、新宮行家が、那智新宮の僧徒に同心を促して來たことを傳へた。

寢耳に水の清盛は大いに驚き、急ぎ軍兵を集めて時を移さず京に

還り、武士洛中に充ちて、たゞならぬ惡氣味さをたゞよわせてゐた。

諸公卿等と相議して東國源氏の兵が未だ馳せ上らぬ前に、以仁王を囚へ奉り、土佐の國へ流し奉らんと計つた。檢非違使太夫判官兼綱、出羽判官光長、博士判官兼成等を遣して兵を率いて、三條高念の宮の御所を取り圍ましめることゝなつた。

よもや頼政に謀叛の下心あるとは思ひもよらぬ清盛は、頼政の三男兼綱にこの大任を命じたのであるが、兼綱は、高念の宮を包圍すべき命に接すると、この由を急ぎ父頼政に告げた。

驚いた頼政は、六條宗信を使者として、平家が今や單兵を發して宮の御所に攻め寄せらるであらうことを告げ、

「急ぎ遁れ出でさせ給ふて、難を園城寺に避け給へ、我等も亦、やがてお供仕らん」

と、いひやつた。

計畫發覺すると、御身の危険を感じられた宮は、女官の衣を着け、女裝して市女笠を被られ五月十三日の夕、折からのおぼろ月かすかに照り渡る東山の慣れぬ山路を、足に血をにちまされて、人に氣づかれ給ふこともなく無事園城寺に遁れゆかれた。

十四日の曉は、宮の御所へどつと押し寄せた檢非違使の兵のときの聲で明けた。

園城寺では、僧侶秀定海等は悦んで宮を迎へ參らせ、法輪院を御所に充て奉つた。

その夜、討手の大將と任ぜられてゐた頼政が、意外にも嫡子伊豆守仲綱、次男檢非違使太夫兼綱、及び頼兼、並に渡邊黨五十餘騎を引き具して宮の後を追ひ園城寺へ趣いた。

急を聞いた清盛は、きつと眉をつり上げ、「何事ぞ頼政、恩知らずめ、我れ先きに彼のために奏して三位の位も賜り昇殿も許されてゐるではないか、それに何の心に慊らぬ所あつてか、我に背くのか」

と、罵り怒つたといふ。

頼政謀叛の事實を知つた人々は、己に天下の大事かと驚愕してしまつた。

一方園城寺に入つた頼政は、寺僧をして延暦寺興福寺へ同心をすゝめ援兵をこさせるよう檄を飛ばさせた。

牒狀を受けた興福寺では直ぐ會議の結果、「同心與力して宮を助け申すべし」

と、決し、返牒を誰れに書かすべきかとなつた時、西乘房信教に白羽の矢が當つた。

信教は信濃に生れ、俗姓海野通廣と稱し海野小太郎幸親の子で、

勸學院進士から文章博士にまでなつて藏人に捕せられてゐたが、専横な平氏を嫌ひ榮譽をさらりと捨て、南都に來つて興福寺で出家を遂げ西乘房信教と改めた。博識能書の上、文章に自在であつた彼は祐筆をつとめて重寶がられてゐた。

園城寺への返牒を書くことを依頼されると、種々特意の文をあやつつてゐた書いてゐる中に、氣骨稜にたる彼は、

「太政大臣淨海入道は、平家の糟糠、武家の塵芥」と、痛罵をあびせた。

この文を見てよろこんだのは大衆である。

「小氣味よさよ」

と、彼等は、胸のすく思ひがして快味をむさぼつてゐた。

一方このことを傳へきいて清盛は烈火の如く憤つて、

「許し難い信教法師め、搦め捕つて素つ首斬つて參れ」

と命じた。

多血な信教は、行ひすました僧院生活に飽きた上、早や南都に止まることもむづかしくなつたので、

「淨海ごときに捕へられてたまるか、無念なれども暫時身をかくすにしかず」

とうそぶいて、漆を湯に沸して身に浴び、膨脹させて龜人の如く身を裝つて南都を通れ出でたのであつた。

後でこれを知つた清盛、

「信教の行方が知れぬとな。うつけ者め、天に翔け地に潜るとも搜し出せ」

じだんだふんで尙もきびしく命じた。

早や廿二日になると、叡山の大衆三百餘人園城寺に加擔するとい

ふ噂が傳はり、南都の大衆騷然に應じて上洛せんとする形勢ありと傳へられ、源氏の兵が既に園城寺に入つたと噂された。

突如反平家の烽火が擧つたのを見て、平家の運のつきる時が來たのかと、驚き疑はれるに至つた。

二

事態の急に、清盛は將士を六波羅に會して討伐の方略を謀議せしめたが、議論區々に分れて容易に決せない。

上總介藤原忠清進み出で、

「思ふに、山門南都の大衆以仁王の令に同心したとき今に於ては之を制すること、甚だ容易ではありませぬ。三井寺の僧徒關を閉ぢて拒ぎ守り、叡山の僧衆險要に據り、東海北陸の源氏の兵を招きよせ、南都又、吉野十津川の衆を率ひて來ましたならば、我等は腹背に敵を受けることになり由々しきことにございます。若し久しく相對持して日を空しくするならば、諸國の源氏も來り合することゝならう。さうすれば勢ひ遂に破り難きになる事も考へて見るべきであり、それ故この際、先づ山門の大衆に利をもたらしめて味方に誘ふが最も急なる方策かと存じまする」

この提案に、清盛は至極尤もと讃同を與へた。

直ちに、米一萬石美濃絹三千疋を山門の詰房に積んで僧徒の心に任せて取らせることゝした。この賄賂に動かされてか、山門の大衆終に協力を見合せてしまつた。

この無節操に頼政は憤慨したが、結極山門も園城寺の僧衆もたのむに足らず、その上兵も寡く持久戦に耐へ難きを察すると、宮を奉じて一門及同志の士參百餘騎と共に南都をたのみとして落ちて行つ

た。

頼政等園城寺を出て、南都に赴くとの情報六波羅に入ると、機を逸せず平知盛、重衡、維盛、忠度等二萬の精兵を率ひて之を一舉に撃滅せんものと進發した。

平等院に據つてゐた頼政等は、平家軍の來襲を防ぐため宇治橋の橋板三間をはね除き亂杭、逆茂木を打つて戦備おさゝく怠りなく宮を守護し奉つてゐた。

廿六日、宇治橋めがけて押し寄せた平家の大軍と戦となつたが、終に戦ひ利あらず、頼政の將士多く戦死し、頼政并に子息兼綱も戦死をとげ、仲綱自害し、宮も亦流れ矢に當つて薨せられてしまつた。こゝに頼政の源氏再興の夢は、はかなく宇治の古岸に消え去つてしまつたのであつた。

けれども、頼政の一唱は大いなる果を結ぶことゝなつた。宮の令旨は廣く東國の源氏に行き渡つて、今まで身のおきどころなく僅に叢の下に潜んでゐた諸源氏の遺臣舊臣、同族同志を糾合し、平家を打たんと相呼應して賑起せしめる導火線となつたのである。

先づ伊豆の頼朝旗を擧げ、次いで北國の雪を蹴つて起つたのは義仲であつた。

中にも義仲、木曾の山間から蚊龍のやうに躍り出で疾風迅雷の勢を以つて諸國を従へ、威風當るべからざるものがあつた。

富士川に大敗を喫した平家は陣容を新たに建て直し、三位中將維盛、薩摩守忠度、越前守通盛等を將とし、十萬の兵を率ひて北陸に入り木曾を撃ち平らげ、更に轉じて東國に攻め入つて頼朝の軍を破つて、之を誅す方策を立て、義仲追討のため潮の如く木曾へ押し寄せたのは、壽永二年四月の半ばのことである。その士氣たるや頗る

旺盛であつた。

三

この時、越後の國府にあつて指揮に當つてゐた義仲、平軍攻め寄せるとの報にこれを迎へ打つため、その將、信濃の仁科宗弘、加賀の林光明等を越前に遣して鷺山城に據らしめた。こゝは北國の入口を扼してゐる天險の要害堅固な城であつた。壯烈を極めた北國の合戦は、まず鷺山城から始まつた。

平泉寺の長吏齊明、千餘騎の大家を率いて來り籠つてゐたが、俄かに變心して平家に内通したしめ、さしも難攻不落と思はれた城も僅か數日で遂に陥つてしまつた。

これに勢ひつき堰を決した水のやうな勢で北國に押しよせた平家は、勝に乗じて諸城を陥れ、越前加賀を風靡して破竹の勢で、その先鋒は越中へ攻め入つた。維盛は、その部將越中前司平盛俊を先遣隊として般若野に屯せしめた。越中をすぎれば、次は越後信濃である。

「齊明が裏切つたとな」

敗報に驚いた義仲は、四天王の隨一、今井兼平に手兵六千をさづけ般若野を攻めしめ、敵を加賀に敗走せしめてしまつた。退いた平軍は、志雄礪並の兩山によつて木曾軍を防がうとした。

「今度は、我れ自ら兵を指揮して敵に臨み、平軍をみな殺にしてくれん」

火と燃えた義仲は、越後を出發した。

義仲立つときくと、北國の兵は争つて旗下に集まり、其の勢五萬となり越中に入り、六動寺に着した。

義仲にしてみれば倦土重來の勢で、必勝の秘策をめぐらしてゐた。

「覺明、これへ參れ」

義仲は、祐筆の覺明を呼んだ。

さきに南都を通れた西乗房信教は、東國に落ち行き一時新宮行家に従つてゐたが、行家と氣が合はなかつたのか仲違ひをして分れると生れ故郷の信濃に歸り木曾義仲を頼つた。義仲は、彼の學才を賞で、大夫房覺明と名乗らせ、兵法を心得てゐたのでよき師を見出したと喜び、祐筆として又軍事の顧問として常に重く用ひてゐた。覺明は、今は義仲四天王の外の唯一の忠臣として義仲に傾倒し、その旗擧げに一臂の力を添へんとしてゐた。

「軍の駆引は謀にあるが、何分にも敵は多勢故、佛神の助けによらねば勝利は覺束ぬと考へる。今靈驗あらたかな白山權現の山の麓にて戰するのであるから、佛神もみそなはして武運を垂れ給ふやう願文を奉らむと思ふぞ。御房速かに狀を認められよ」と命じた。

「かしこまつて候」

覺明、矢立を取り出し、さら／＼と祈願狀を認め初めた。

義仲も目を閉ぢ、白山を拜してしきりに心中に祈念をこらしてゐるやうであつた。

書き終ると、義仲は武將を従へ白山社に詣で、願文を獻け、大捷を眞摯に祈つた。

義仲にしてみれば、今平家の大軍を前にして浮沈に關する一戦であつた。若し一敗せんか、命をも落し、再び起つ能はざる運命ともなりかねなかつた。

四

六動寺から打つて上つた義仲は、次いで般若寺の河端に着し、敵の布陣を考へ、武將を集めて軍略を練つてゐた。

「味方は寡し平家は多勢故、敵若し礪並の險阻を踰へて我を平地に撃てば、味方の勝利は覺束かなからう、されば我れまさに進んで先づ礪並山の麓に陣を取る必要がある。さすれば敵は必ず猿馬場に陣を布いて我が軍を待つに相違ない。その時兵を分けて南北より並び進んで攻めるなら、敵は必ず逃げ場を失つて俱梨伽羅の絶壁の處に赴いて、自ら生命を捨てることゝならう。その勢に乗じて疾く攻め立てれば勝を得ること相違あるまい。この議、いかに思ふぞ」と計つた。

「御大將の方略誠に面白し」

すぐ讃同したのは、兼光であつた。

かくて妙計を立てた木曾軍は、俱梨伽羅山麓に陣をとつた。

義仲の豫想した通り平家軍は、礪並山の山中猿馬場に兵馬を休めて木曾軍の動靜を覗はんとした。新緑におびたゞしい赤旗を照り映えさしてゐる。特に礪並志雄の兩山の險路を越へて越中に進撃せんとする態勢をとつてゐると見た義仲は、

「木曾七陣の吉例によつて初めは七手に分れ、後には寄り合ふて一手となり揉みにもんで南の谷に追ひ落すべし」

遙かなる敵陣をきつとにらんで、聲を大にして下知した。

七陣の法とは、兵を七隊に分ち、魚鱗をならべたやうな陣形をとる。一隊を先頭において、前軍、中軍、殿軍と陣形を左右三段に布き、先隊の兵を四にして別に伏兵をおき、機を見て敵の主隊をつく

戦法であつた。

行家、根井、今井、樋口、巴の諸將に命じ、部處を定めて道を分ちて俱に進ましめた。義仲は自ら精兵を率いて小矢部河を渡つて埴生に陣した。

埴生に屯した義仲四方を見渡すと、はるか彼方の山の端に當つて緑に掩はれた夏山の緑の木の間から、朱塗の玉垣がほのかに見え、尙よく見ると、山林高く岨えた苔むした鳥居さへ目に映つた。それがまるで繪巻物をくりひろげたやうに美しく見える。

義仲は、當國の住人、決田次郎忠康を呼んで、

「あれは、何の宮と申すぞ、いかなる神を祀りおるか」と訊いた。忠康、形をあらため、

「されば、あれこそ八幡にわたらせ給ひ、埴生の新八幡と申します」

「ほう、八幡の社とな」

八幡殿四代の孫と自負してゐる義仲は、源氏ゆかりの八幡社ときいて、喜びに顔を輝かせながら大きくうなづくと、

「覺明、これへ」

と、さし招いた。

覺明、馬よりひらりと下りると、義仲の前に跪いた。

覺明その日の装ひは、褐の鎧直垂に首丁頭巾して裙襦目の冑に黒羽の征矢負て三尺一寸の赤銅作りの太刀佩き、塗籠藤の弓を小脇に挟んだ天晴れ文武二道に達した猛々しい法師勇士振りであつた。

「覺明よ、今計らずも當國の新八幡宮の御寶前に近づき奉つて合戦を遂げようとする。今度の軍に勝たんことまさに疑ひなし、大捷を祈るため、且つは後代のため願書一紙社殿に納めばやと思ふがい

に

「この儀、尤も而るべしと存じまする」

「ならば、よきに計らへ」

兜を抜いで高紐にかけた覺明しばし瞑目してゐたが、簾の中から矢立取り出し墨を筆にふくめて疊紙にさら／＼と書き流した。

「ウム、まことに見事な名文ぞ」

氣魄にみちた願文を見て、義仲は満足さうにはゝえんだ。これが天下の名文と聞える三大願文の一である。

折柄雨ふりしきる中を義仲願文を古びた社壇に敬虔に獻げた。全軍聲をのんで寂としてゐる。覺明の莊重な經を誦する聲のみが聞える。義仲は、胃をぬぎ頭を地につけるばかりにして祈念をこらした。

祈願を終ると、將兵意氣天をぬく勢で更に進んで黒坂に陣し、平家の大軍といよ／＼相對陣して全軍氣負い立つてゐた。

兩軍日没に及んで大衝突をなし、激戦數度に及んだが未だ勝敗は決しない。やがて日も暮れ五月暗の中に對峙した。

夜に乗じて義仲、かねて用意の牛五百餘頭に炬火をその角に縛し、之を點火して兵をして其の後から、鬨聲を擧げて平軍の陣に追ひ込ました。數百千の太鼓を打ち法螺陣貝を吹き、その響き山も崩れ谷も碎けるばかり轟き渡つた。怒りに燃えほえ鳴き荒れ狂ふ牛は、紅蓮の魔王の如く敵中に殺到し狂奔した。

その時山北を廻つた義仲の一部の軍は、平軍の背後に出でたので平家は腹背に敵を受けることゝなつた。谷深く山高く峻阻な上、道細く人馬も行き違ふに容易でなく進退共に自由を失つてしまつた平軍の驚き一方でない。暗さは暗し道は狭し、馬は狂ひ人は周章で、

押し合ひへし合ひ恐怖にかられて、一方に開いた道逃げ路と思つて、人馬相ついで俱梨伽羅の南谷へ陥ち入つて、屍積んで地獄の相を現出した。崖谷に陥ちたもの一萬八千と稱され、維盛等僅かに身を以つてのがれ、敗兵を集めて加賀に走つてしまつた。(つゞく)

(三十二頁より)

としたり、自分の好むことを祈禱に求めたり、病氣を墓相のせいだとか家相のせいだとか考へたりするのは、すべて繩上の蛇相を恐れ逃げるに等しいのである。そのやうなまどいは、道理を見る目、佛教の緣起の理に依つて排除せねばならない。繩を見て、緣起の理をたどれば、麻の圓成實性を見ることが出来る。現實を正しく見て、そのこゝに至つた道理を考へれば、現實をあらしめた眞實そのものに到達することが出来る。そして、眞理の立場に立つて現實を見直して、人生觀を立てねばならない。そうすればすべての變化や具體的事物を、夫々に意義あるものとして眺め、それ等を充分に生かす立場に立ち得るのである。死も、麻が繩になり布になり網になつて居る夫々の意義と働きを認め生かす立場である。そしてその様な立場こそ、佛智の立場なのであり、ものを、圓成實性に於て認め、勝義無自性の立場で、自由にあらゆる働きを現せしめるものなのである。

病氣が祈禱でなほつたり、資産が墓地の改葬で出来たりするのは、その様に見えただけで、繩を蛇と見てさはぐものと言へる。

(大正大學教授)

佛 教 入 門 (その五)



生 存 の 構 造 (三)

佐 藤 密 雄

(一) 繩上の蛇相

印度の無著菩薩は次の様な譬へを述べられた。蛇を怖れる人が夜道を行くと突如として前方に一匹の蛇のよこたわつて居るのを見たので、驚き怖れて逃げ歸つた。然し第二の人が同じ道を行き、第一の人が蛇を見た所に來て灯をかがげてよく見たが、其處には蛇は居らずして一筋の繩のあつたことを見たのである。即ち第一の人が蛇としたのは實は繩であつたことを知つたのである。其處で亦、第三の人があつて同じ道を行き、其場所に來て、今度は灯を明るくして繩をよく調べて見て、繩の實性は麻であると知つたのである。

この譬えは三つの立場に把えられて居る存在の三相を示したものであるが、三人の人に依て無知の一般人と佛道を修行する聖道の行者と佛道を成じた佛智者との三つの異なる立場を代表させ、更に亦た蛇と繩と麻とに依つて、一般人が感情的に實在として執着するものと聖道の行者が理智を働かせて見る存在の受取り方と、その聖者の見るものを佛智が見る場合の受取り方との、三つの存在の異りを代表して示して居るのである。

そこで第一の人は繩を蛇と見て、この蛇を實在として逃げ歸つたのであるが、實際にはこの蛇は恐怖の感情が繩の上に幻想したにすぎないものである。佛教語で言へば當情

現と言はれるものである。即ち盲情に現はれた幻影であつて情有理無のものとも言はれるものである。情有理無とは恐怖の妄情には實在するとせられるが、道理としては全く無きものと言ふ意味である。そしてこの第一の人が無明者とも凡夫とも言はれる一般人の立場を示すのである。なほ凡夫とは印度の言葉で一般人の意味であつて決して世上の下等者や悪人の意味ではない。佛道に入らない世間人を一般人の意味で凡夫と言ふのであるが、此様な人が又た無明者と言はれるのである。この無明とは無知の意味であるが、然し無明者は、亦た世間の無知文盲者の意味ではなく、未だ佛敎に入らない爲めに佛敎的考へ方に無知であると言ふことであつて、無知低下の者としていやしむ意味ではないのである。

佛敎的に見れば、第一の人の世界、即ち蛇なきに自ら蛇を現じてしかもその蛇を怖れて逃げる生活が、凡夫と言はるゝものゝ生存で、我々一般人の生活の現状である。宛も夢の世界の如きで、自ら描いた夢想の世界に好ましきを執し、好ましからざるを憎んで狂ほんして居るのである。自我を執し、生死に悲喜する現實を、人世長夜の夢と言ふのは此故である。そして此様な、蛇なきに蛇相を執して怖れる様な生存を、即ち長夜の夢の世界とも見らるゝ生活状態を、遍計所執性の生存若しくは存在と言ふのである。妄想とも妄情とも言ふべきものが、蛇なきに蛇相を描いて（遍

計して）それを實在と執着（所執）して居るに譬ふべき性質のものと言ふ意味である。そこで、一般人である凡夫人が執着して居る対象物も、自信して居る自身も、すべて繩の上に幻想された蛇の如き、遍計所執性のものと言ふべきものである。

夢の世界や第一の人の見た蛇は遍計所執性のもので、幻影の様なもの實際には全くないものであるが、然し此やうな幻影を描いて居る心は全くないものではなく、夢見る心は亦醒める心であるし、蛇相を幻想する心はやがて繩を見る心である。又夢の世界もたゞ無原因に夢想されるのではなく、覺醒時の經驗や記憶や知識等を材料として、夢心が夢想するのであるし、蛇相も亦、實にある繩を妄分別して生じたものである。即ち迷へば誤り、悟れば事實を見るものである。即ち遍計所執性のものは繩上の蛇相の如く實になきものであるが蛇に見誤つた心と、其心に蛇と見誤れた繩とは全然なきものではなかつたのである。此の「なきものではない」ものを見たのが、第二の人、即ち燈をかゝげて、繩を見た人である。

繩上に蛇相を描いて逃げるのが一般人で、これはたゞ盲目的に、感情のまゝに分別執着をし、理性に基いた反省判斷の少しもなき立場のものであるが、これに對して、燈をかゝげて蛇でない繩であると見た人は、理智に依つて判斷する佛道にある人である。「理智に依つて」とは、佛敎では「緣

起の道理に依つて」の意味である。第一の人の見た蛇相は妄情の幻想にすぎないが、妄情が捉へた繩や妄情を生じた心は、妄情を生じもし、或は佛の悟にも至る存在である。

(二) 蛇と繩と麻

上の譬へで見た蛇は全く存しないものを有りとするものであるが、然しそれは、繩をば、蛇を恐怖盲情が見誤つて蛇として居るのである。死も一般人が、人間の生存が生死無常であるのを當然とせず、譬へば死を不當な苦として嘆く如きは、生存の實際に生きず感情的に誤り執した生存に悲苦して居るのであつて、あたかも繩上に蛇相を執してそれを恐れ逃げるに等しいのである。上述の蛇と繩と麻との三つの中で、蛇は一般人である凡夫の執して居る生存を代表して居るのである。此に對して繩は佛教の道理で生存を眺めやうとする聖道の行者に見られて居る存在である。蛇と誤り見られたのは繩であつたとして、感情的分別でのみ愛憎したものゝ實體を見出した立場である。生存は無常なるものである。一身一物は夫自身であるものでなく、生存のすべてのものが種々にかゝはり合つて、一つの意味ある存在となつて居るその相を、その相に於て見るのが繩を見る立場である。

一人の人も、親に對して子であり、子に對して親であり職場では課長であり、町の世話役であり、妻の夫であり、

雇用人の主人である等の複雑重層した立場で生きるが、これを佛教的に言へば、その様な關係(緣起)に於いて、又その様な關係に入らしめた種々な關係(緣起)に於いてその人が具體的な人として成り立つて居るのである。その様な複雑重層した關係をはなれて、具體的にその人がないのである。私共は人を紹介するにも、何々會社の重役とか何々黨の代議士とかと言つて紹介するが、此の事は既に、その人を具體的に成り立たせて居る關係を示して、他に紹介し理解させることに外ならない。

繩は、麻が繩と具體化する緣に依つてその繩となり、道の上に切れ落ちる緣に依つて一切れとなつて道に落ちて居たのである。此の事實を見たものは、進んで、緣起の理を究めて、それ以前の狀態なる麻を見るのである。關係道理に目醒めた聖道の行者は蛇に怖れる感情を排して、繩を見出したが、更に繩がその繩に具體化して來た關係道理を追究すると、關係道理を超えて、そのものゝ實性に達することが出来る。

蛇と繩と麻の譬へで、既に述べた様に第一の人の見た蛇は遍計所執性のものと言はれたが、第二の人の見た繩は依他起性のものと言はれる。「他に依つてあるもの」と言ふ意味で、「他とは」「緣起の道理」と言ふことである。即ち、繩等に具體化する關係道理に依つて現狀に具體化されて居るものと言ふ意味である。従つて、此を具體化して居る關

係道理について追及して行けば、譬へば繩は麻であることになる。麻がたまたま繩となつたのである。そして、麻は必ずしも繩にのみなるものではなく、縁に應じて麻布ともなるし、網ともなるし、其他種々なものになる。言はゞ、縁に應じて何物にもなり得るものである。其處で、蛇を既に述べた様に遍計所執性と言ひ、繩を今述べたやうに依他起性と言ふに對して、この麻を圓成實性と言ふのである。完全な實性と言ふ意味である。そして繩を見る立場は理性に基づく見方で、聖道にある立場のもの見る目であつたがこの麻を見る立場は、理性を完成して超えた見方、聖道を圓滿して佛智を得た立場の見る目である。

(三) 三 性

第一の人の蛇相を例とする遍計所執性の存在は、相無自性のものと言はれる。蛇相の如きものはないのであるから誤り見られたものゝの意味である。第二の人の見た繩を例とする依他起性の存在は、縁起無自性のものと言はれる。麻から繩となる縁あつて繩となつて居るもので、そのものに具體化された關係道理の上で、その様になつて居るものであるから、その關係をはなれて、元來の繩と言ふ様な實性はないものと言ふのである。現實の生存は自分自身にしる自身を取りまくものにしろ、すべては繩の如きもの、即ち依他起性のもので縁起無自性のものであるが、此をその様

に見ず、自分の好惡の感情の分別のまゝのものとしてあると考へ、此に憎惡又は執着するのが、譬へば蛇相の如き遍計所執性の存在である。故に繩を例とする依他起性のものを、誤れば相無自性の蛇相を見ることゝなり、又依他起性の繩をば道理に依つて追及して、縁起無自性たるを知ればその實性たる麻に達するのである。

麻の例に依つて示される圓成實性のものは勝義無自性の存在と言はれる。彼の蛇相の例で示される遍計所執のものは、全く妄情の描く妄想で、正しくはないものとの意味で相無自性であつたが、今の麻の勝義無自性は、此とは全く違つた意味の無自性である。即ち、鎖とか布とかと言つた一つのものに限定されないものと言ふことで、無限定の意味で無自性と言ふのである。ある一つのものに限られないもの、従つて亦、縁に應じて、何物にも具體化し得るものと言ふ意味に外ならない。

私共は存在を考へるのに一番大切なことは現實を誤りなく把えることである。現實は縁起してあるもの、あるべき道理關係の上に、そのように現はれて居るものである。即ち蛇・繩・麻の譬への繩の様なものである。そして、迷ひも悟りもともに、この現實からである。恐怖心が繩を蛇と見るやうに、自身の愛憎の感情のまゝに現實を勝手に分別しては種々な蛇の類を描くのである。不幸を惡靈のたゞり

後記

○先頃、浄土の會員の方よりいたゞいた私信のなかに、

「私も、この歳になつて漸くせめて興えられた一日の食前に坐つたときだけでも泌々とした心をもつて箸をとり上げたいと思うようになった。古徳の方々が一尾の魚に對してさえ、念佛してむくいられた心もちもおのづから窺われる。一椀の飯も、粒々みな法縁の辛勞からさふげられたものであることを思うと合掌せずには居られない親しさ、涙ぐましさを感じられるのです……」との一文があつた。

日常茶飯の誓みの中にも、豊かな恵みを見のがしていることを思いきびしい反省に迫られた。天の恵みと地の福をそして人の働きとを讃仰したいものである。

○浄土の佐藤密雄先生が少々健康を害されて御静養の由、最近の先生は多方面に亘り仲々お忙しき様子。それにしても御無理は何より禁物です。

○毎月發送する毎に月刊誌の使命

は肝に銘じているが、印刷等の都合で如何ともしがたい現實に悲哀を感じている。でも常道に復そうとしている編輯子の心の中も少しはお審しねがいたい。

○先月號は思わぬ處から反響があり、仲々好評を博している。忌憚なく御意見をお聴かせ下さい。

(宮林)

○増上寺山門に「節分追儚式」と大書した大額が掛けられ、横に政界・財界・藝能界等名士が年男・年女? に名をつらねて書かれていた。とかくさはがれているおりから、追儚のみで終つて來れることを祈る。

○ハワイに巡教中だつた佐山學順氏診断の結果食道癌との事であつたが、小康を得て去る一月二十六日午後一時半、羽田空港に、歸着され、その後千葉醫大で診断の結果入院された。

○一月九日の産經時事學藝欄に高橋義孝氏が「五六年度文學の豫想」を書いていて、その中で「武田泰淳は今年あたりきつと動き出すと思う。動き出すと云うのは、小

説家をやめて本職の坊さんになつてしまふようなこともそのひとつである。しかし私にしてみれば、そうなられては困る」と云うような事を云つてゐるが、氏自身にはそのような氣持はないらしい、と云うのは、これは御母堂の言だから。

(水谷)

○本會々員であられる、歌舞伎俳優市川三升丈(本名堀越福三郎氏)が二月一日狭心症で死去された。行年七十三才。九代目團十郎の御養子として、堀越宗家を襲がれ、「矢の根」「不破」等、歌舞伎十八番物を得意とし、近年同じ十八番物である「蛇柳」その他、古典の復活に異常な熱意を示され、劇界に貢献されていただけに、その死はひとしお惜しまれてならぬ。本誌もかねがね、一度御訪問したく準備していたが、いろいろな事情から終に實現できなかった。ことは、はなはだ残念であつた。昨年九月、歌舞伎座での最後の舞臺となつた「鞍馬山だんまり」はいまだに記者の腦裏にありありと刻まれている。

(梅津)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十一年一月廿五日印刷
昭和三十一年二月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常

發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川区上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人遺仰會

電話 東京八二一八七番

御袈裟法衣御調進

○錦金襴

○特種織物

○御水引

○御打敷

○御幡

○稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新装の稚
兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺
宗務所
大正大學
芝中高校
淑徳学園

御用達

東京都港区西久保巴町一〇六

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモ
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
管・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)
組立説明書送付